

死の海、回復に向う 水俣湾

水銀汚染度下がる

入鹿山熊大 教授が証言 一部は基準以下に

水俣湾発生以来「死の海」といわれた水俣湾も、チツソ工場がアセトアルデヒドの製造を中止して以来、水銀汚染の度合いが少なくなり、一部の調査では汚染度が厚生省の基準以下になっていることがわかった。



入鹿山熊大教授

達した「水銀による環境汚染の暫定対策要領」に示されている。それによると、魚群の八〇％以上の総水銀量が一PPM以下であれば一般的な濃度レベルで水銀中絶の危険はないとしている。この調査のために五十近い百尾の魚を調査する必要があるが、入鹿山教授はサンプル数については明らかにしていない。ただ、水俣湾でとれたタイでは〇・〇六PPM、キス〇・五PPMの結果を得たと語っており、アサリ貝ではなお一PPMを超えるものがあったという。しかし、三十五年八月の調査

十五日前熊本地裁で開かれた新潟水俣病の出張裁判で、証人の入鹿山熊大教授が証言の中で明らかにした。入鹿山教授は原告側の最後の水俣湾の汚染度についての尋問に答え「八月行なった魚介類の蓄積総水銀量調査では厚生省の示した基準の一PPM以下のものがあつた」と述べた。入鹿山教授は「チツソ水俣工場が五月十八日アセトアルデヒドの製造を全面的に中止したことによるものと思ふが、水銀量が急に減って意外な好影響がでていることに私自身びっくりしている」と説明した。厚生省の基準というのは、こし八月十四日環境衛生局長名で通

ではヒバリカイモドキの総水銀量は三〇PPMもあり、これと比較するとその激減ぶりはハッキリする。この調査結果は二十五日京都市で開かれる「公衆衛生学会」で入鹿山教授が正式に発表するという。